

助産婦っていいね！

北尾 智子

黒田クリニックリプロダクションリサーチセンター助産婦（東京都中央区）

今年3月で看護短期大学の教員を辞め、解放感に浸っていた頃、「りれ一随筆」執筆のお話をいただきました。

あまりにも忙しすぎたこれまでの生活を離れ、頭を真っ白にすることができた今、振り返ってみると、「助産婦」という職業が私自身を人間として大きく成長させてくれたのだとしみじみ思います。たくさんの方々との出会いを通じて、多くのことを考え、学べた、とても貴重な日々を過ごすことができました。

私の助産婦史

14年前、助産婦学校を卒業した私は迷うことなく、卒業した看護学校の実習病院であった大学病院に就職しました。大学病院ということもあり、産科病棟の看護の対象は「特殊」でした。正常に経過していく妊婦、産婦、褥婦は少なく、対象の方々は大半が不妊や不育に悩んでいる方、胎児に異常が見られたり、合併症をもたれた妊婦でした。ここでの4年間は、辛いこともありました。目の前の新しいもの全てに興味をもち、何事にも前向きに取り組む、仕事がとても面白かったように思います。医師ではなく、助産婦でなければできない独自の役割とは何だろうと考え、産後の乳房管理に力を注いだ時期もありました。

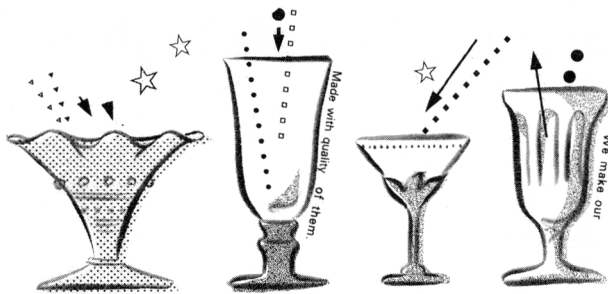
しかし今思うと、その頃の私は、目先の業務をこなすことばかりに目が向いていたような気がします。毎日が同じような繰り返しであるという錯覚にも陥っていました。看護の対象は一人一人異なるにもかかわらず、対象を「中毒症の方」とか、

「切迫流産の方」などと疾病で括って対応する、マニュアル人間になっていました。

その後私は、実家の近くにある地方の日赤病院で働きました。都会の大学病院とは違い、看護業務も異なり、多くの戸惑いがありました。看護の本質は、病院が違って土地柄が違って変わらないということを理解できていなかった私は、環境の変化によって、なぜか自分が小さくなっていくようで不安になったものです。そしてその頃の私は、目の前の患者さんに目が向かず、「私自身が仕事ができるようになるにはどうしたらよいか」などと、常に自分中心に物を考え、仕事をしていたように思います。患者中心という、看護が目指すべき対応ができるには至りませんでした。

しかし自分自身が病床生活を体験したこともあり、次第に「看護婦って何だろう」「助産婦って何だろう」と、患者の立場から考えることが多くなりました。そして看護や助産の本質を見失っている自分に気づかされ、自分にはこの仕事が勤まるのか不安になり、この職業は実は合っていないのではないかとまで思い始めました。

そんな中、日本看護協会の看護研修学校で1年間勉強する機会を得ました。そこで私は「看護」のすばらしさを心の底から初めて確信し、再び臨床の現場で頑張りたいと思い、大学病院に戻りました。そして今後、助産婦という仕事を続けていくためにNICUや小児外科における看護を学びたいと考え、病棟勤務を希望しました。さらにその後は、これまでの自分の体験から学び得た「看護」のすばらしさを後輩に伝えたいと、看護教育



に携わるようにもなりました。

尊い命

女性として助産婦として

以前、結婚もしくは妊娠を機に、私は仕事を辞めようと思っていました。仕事を続けながら家庭をもち子育てをすることは、自分には無理ではないかと感じていたからです。私には、仕事をしながら妊娠生活を送っている方、小さいお子さんを育てている方がとても大変そうに見え、また女性にとって不利であると考えもしていました。もちろん社会のシステムを見直すべきですが、現状から、女性が家庭をもち子育てをするには、周囲の協力がなければ難しいということを、しみじみ感じていたのでした。

独身時代の私は、大半の時間を仕事に費やしていました。また仕事をしながら大学、大学院生活も送り、最近結婚をし、一気にいろいろなことが押し寄せてきました。女性として、助産婦として、これからの人生についてゆっくりと考える時間が欲しかった私は、「今までは精一杯仕事に打ち込んできた」と自ら納得し、ひと区切りつけようと3月に仕事を辞めたところでした。

昨今では、夫婦共働きのカップルが多くなってきました。結婚し家庭をもち子育てをし、助産婦(看護婦)という仕事を頑張っている方もたくさんいらっしゃいます。そんな方を心から尊敬し、私も仲間入りできたらと願っています。職場で協力できるような人間関係づくりやシステムづくりなど環境が整えられ、女性も男性も仕事と家庭が両立できる社会に、早くなってほしいと願います。

子を産むという大役を果たし、児を抱き、病院をあとにする夫婦は、新しい生活に胸はずませているかのように見えます。しかし、最近の子育てに悩む母親も増えています。

また家族のあり方が変化している今日、虐待などによって、幼い命が断たれるという悲惨なニュースも耳にします。逆に親が自分の子によって命を奪われる事件も起きています。

これらのことは、もちろんいろいろな要素が絡み合っていることとは思いますが、「命」の誕生をサポートする助産婦にとっては、「どうして?」と、心が痛みます。助産婦の力だけでどうすることもできないことはわかっています。しかし、何かできることはないのだろうかと考えさせられます。

これから

私は今、不妊症を専門とするクリニックで新たに仕事をしています。顕微鏡を介して精子と卵子を実際にこの目で見ながら、医療技術の進歩にびっくりする日々です。先日ある患者さんから「医療の力を借りないと私たちには子供ができない」と言われた時、助産婦である私ができることは何だろうと考えさせられました。

最近私は、助産婦という仕事の広さと深さを実感しています。「やればやるほど味がわかる」そんな助産婦という仕事を、どんな形であれ続けていきたいと強く思う今日この頃です。

次回は藤森紀子さんにバトンを渡します。